

ローワン・ジェイコブセン著「ハチはなぜ大量死したのか」

文藝春秋社 2009年1月30日刊を読む

あなたのその朝食は

- リンゴにプラムに梨、アーモンド。あなたが食べるその果実はみな、ミツバチの授粉で生まれたものだ。花から花へ飛び回るそのミツバチによって -

1. 7月のある朝。私はキッチンで朝食の用意をしている。息子には、オーガニック・シリアル
の「ハニー・ナット・オーズ」、妻と自分にはアーモンド入りグラノーラ。その上にブルーベ
リーとチェリーを山高く積む。サイドディッシュは切り分けたメロン。アップルジュースとコ
ーヒーも添える。色や歯ごたえや香りが五感を刺激するおいしい朝食だ。それでも、ミツバチ
がいなくなったら、こんなご馳走にはありつけない。食卓にのぼるのは、風に受粉をまか
せるオート麦と、それを浸す牛乳ぐらいしかなくなってしまうだろう。

2. なぜかという、ブルーベリーもチェリーもメロンもリンゴもみな果実で、果実は特別だか
らだ。アーモンドのような木の実も、ただ種が大きいというだけで、やはり果実であることに
変わりはない(アーモンドも、桃やプラムと同じように中心に固い核がある「核果」だ。種の
周りに柔らかい果肉があるのだが、その部分は食べられない。桃の場合は、実を食べて種は捨
てるが、アーモンドはその逆だ)。コーヒー豆も、収穫時は果肉に包まれている。キュウリや
トマトやピーマンやスカッシュ(キュウリのような形をした瓜科の植物)など、ふだん私たちが
野菜だと思っている多くの作物も、実は果実の一種だ。果実は、野菜や肉や、その他もろもろ
の食物とちがって、食べられたがっている。できるかぎり動物の目を惹くよう、できるかぎり
動物にとって美味になるようにと自然が仕組んだのだ(ほんのちょっと人間の植物育種家の力
を借りたところもあるけれど)。

3. この自然のもくろみは大成功している。どれほど加工農業の最終段階にある食品になれ親し
んでいようが、どれほど霊長類のルーツから離れようが、私は、よく熟した鮮やかなサファイ
ア色のブルーベリーに原始的な反応を示してしまう。口の中にはつばがたまり、するすると手
が伸びて、果実の奴隷になる。果物には目がない9歳の息子は、ケーキやクッキーには目もく
れず、果汁がたっぷりつまったピンク色のスイカにとびついてゆく。

4. 我が家の面々に確かに奏功しているこの自然のもくろみは、動物に果実を食べさせて、その
植物の種を運ばせることにある。植物は、動けないという一大問題をこうやって解決してきた
わけだ。これはいわば植物と動物が交わした太古からの盟約で、植物にとっても、動物にとっ

ても、今までとてもうまく機能してきた。私たち霊長類もこの盟約に関わっていることは、ちょっと考えればすぐわかる。ついこの前にトイレが発明されるまで、種子の運搬に大きな役割を果たしていたのだから。

5 . 実は、植物と交わした盟約は、もうひとつある。こちらのほうは大きな動物がめったに関わらないので、重要さは変わらないのに見過ごされやすい。私たち人間は、社会基盤のあらゆる階層において、この自然界の盟約を見事に無視してきた。そして今、そのしっぺ返しを壊滅的な形で受けようとしている。

P.4 ~ 5

[コメント]

生態系の破壊はついに八チの大量死となって現実のものとなった。あらゆる主要作物を遺伝子組み換え技術によって無性生殖で作 。現代文明のあり方を問う本書の価値は大きい。

- 2009年5月14日林明夫記 -